

<法政今昔>新制大学発足・前後

著者	田中 喜一
雑誌名	日本文学誌要
巻	65
ページ	128-131
発行年	2002-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020208

新制大学発足・前後

田中喜一

敗戦直後、占領軍の指令によって行われたさまざまな改革の中で、教育制度の改革は制度だけではなく教育理念そのものをもゆるがす大きな改革であった。いわゆる六三三四制の施行である。私は学制の旧制と新制の狭間でひどい混乱の中に投げ込まれた世代のひとりであった。

昭和二三年（一九四八年）四月、法政大学予科入学。もちろん旧制である。中学五年を卒業して進学したのであった。予科であれば当然その先に本科（学部）が想定される。当時の法政予科では進学すべき学部別の編成をとっていなかったが、私は当初から文学部国文科へ進学するものと決めていた。中学の上級生のころ、すでに「日本文学原論」や「近代日本文学の展望」を読んでいて、その著者である近藤忠義・片岡良一の両先生が法政文学部の教授であることを知っていた。また気鋭の批評家小田切秀雄氏もまた法政の教師であることを知っていた。やがて学部へ進んだ晩には、これら三先生の講義を受講することを目標に法政の予科を選んで受験したのである。三先生以外の教授については全く知識がなかった。

私大では予科（三年）学部（三年）の一貫教育に特長があり予科は学部への準備期間と考えられていて、語学を中心に基礎学力の涵養が目的とされ時間的にも余裕があり、どこかのどこかで牧歌的な雰囲気をもった校風であった。その上、中学時代には味わえなかった一種のおらかさを備えた進取の気質が予科全体に漲っていた。私にはこの予科の空気が好しかった。その校風がある時期を境に一変したのである。

予科一年の秋、一片の通達が張り出された。それは予科廃止の通達であった。来年度（昭和二四年度）から法政大学は新制大学として新発足することになった。新しく教養部を設置し、予科一年・二年修了者はそれぞれ教養部一年・二年に移行する。教養部の学舎は旧予科（川崎市木月）を使用するということであった。私はこの通達に接しても単に予科が教養部と名称変更になったという程度のことと即断し、別に何の感慨もなかったが、教養部が発足してはじめてこの新事態に翻弄されてしまった自分に気づいたのである。四月に教養部の入学式に出席して、まずその夥しい人数の群に一驚した。予科では語学別にクラスが構成

され四五十名のクラスが十で一学年であった。五百名に満たなかったであろう。ところが教養部の入学式に集まったのは（講堂に入りきれないためグラウンドで行われた）新制高校一期卒業生、旧専門部（法科・商科・経済科など中等学校卒業後三年間の専門課程）一年修了者、それに私たち予科一年修了者を合すると千数百名の学生がそこに集っているのである。この人数が教養部の性格を形づくったのである。語学のクラスも百名を超え、一般教養に至っては二百名から三百名のクラスが編成された。マスプロ授業の走りである。もともと予科の学舎は四五十名のクラスを想定した教室が多数であり、合併教室もせいぜい百名くらいが収容できる程度のものであった。そのため大学当局は急拠多数教育のための木造校者を急増したのであった。教員は予科の先生方がそのまま教養部へ移行したが、授業内容は著しく変ってしまった。予科時代には諸先生と教室で直接に授業を受けるか否かにかかわらず、それぞれが厳しくはあったがアットホームな暖かい人間関係によって結ばれていた。例えば平井豊一先生（英語）の授業では訳語の一つ一つが日本語として美しいかどうかを徹底的に突っつまれ、I love youをその場その場の状況でどのように日本語として訳するかを一人一人に答えさせるというようなこともあった。広末保先生担当の「国語」では西鶴や近松の作品のていねいな講読と斬新な評釈で、必ずしも文学部志望者ばかりではない予科の学生たちにも元禄文学の面白さを十分に堪能させていた。ところが教養部になって広末先生は一般教養の「文学」の担当ということになってその最初の講義に出席した私は、三百名を超える学生たちを前にして途惑ったような先生の姿をみた。騒がしい教室の後ろの席にいた私の耳には、広末先生の「二葉亭は……」「浮雲が……」というつぶやきに近い声が途切れ途切れに聞こえてきた。おそらく「文学概論」を講じられていたのだろう。マイクもない時代である。百名を超える語学の教室においても一般教養と大差はなかった。予科時代の人間的ふれあいといったものはもう失われてしまったのである。先生方にしろ大学当局にしろ、新発足した新制大学の設置理念や教養部の存在理由などを深く理解するには余りにも日が浅かったし、準備不足のままに見切り発車をせざるを得ないということであったであろうか。何よりも始めて経験した大人数教育の消化に大学当局も先生方も困惑していたのではなからうか。それらは年を追って改善・整備されていったことであろうが、一四年の発足当初はまさに過度期そのものであった。混沌の時代であった。

結局、私は教養部の教育に完全に絶望してしまった。以降、学業を怠けに怠けて下宿で読書することを自分に課した。北向き三畳の裸電燈のもとで読書三昧の生活にかわっていった。いわゆる濫読である。中学時代にも予科時代にも濫読の経験はあったが、それらは手当り次第の乱読であった。今度ははつきりと目的をもって濫読生活に入るのであった。文学史年表を自作して主要作品には印をつけて、片っぱしから読破してゆくのである。万葉・古今・竹取・伊勢、源氏……等の古典と、明治文学を二つの柱に据え、昼夜を逆転させるような放恣な読書生活であった。テレビはまだなかったしラジオも持っていなかった。映画や

芝居も敬遠し、もっぱらの読書であった。当時は「日本古典文学大系」のような便利な書物はなかったが、テキストの大半は岩波文庫で間に合った。「源氏物語」は金子元臣の注釈本三冊を一ヶ月近くかけて通読した。古典を読むためには良い辞典が必須であって「大日本国語辞典」五冊と「日本文学大辞典」八冊を乏しい金をはたいて揃えていた。

必読文献をはっきり定めた濫読ではあったが、番外というものもある。横山重校訂「説経節正本集」二巻を偶然みつけ、高価であったが買い求めて読み始めた。説経節は私の読書計画には入っていなかった。読みづらく途中までは苦勞したが、読み進めるうちにいつしか「さんせう大夫」「俊徳丸」などの口誦文学のもつエネルギーと庶民の生活実感とに魅せられ、幾夜か夜を徹した。和辻哲郎が説経節研究を「芸術新潮」や「心」に発表するよりずっと以前のことである。これが機縁で横山重校訂「室町時代小説集」「古浄瑠璃正本集」を探し歩いたが、手に入れることができたのは大学院に進んでからである。これらの本は今では角川から新装本で出ている。

登校は必要最小限にとどめた。出欠をとる課目は代返を頼んだが、当時の混乱期で出欠はそれほどやかましくはなく、その点では助かった。体育実技の試験がありこれは必須課目だから必ず受験せよと友人から速達で連絡があつて、大学で体育とは……と腹が立ったが、指定の日に登校した。百名ほどが鉄棒の下に集り、自分の出来る鉄棒の体操をしろというのが課題であつた。驚ろいたことには半数以上が何にも出来ずに鉄棒にぶら下つたままであつた。中には鉄棒に飛びつけない者もあつた。戦中から戦後にかけての極度の食糧難による体力不足がこんなところへも表われていたのだろうか。私もまた鉄棒ぶら下りの一人であつたが、それでも何とか単位はとれた。学年末には大量のレポートと一夜漬けの試験でどうやら教養部を修了することができた。二六年四月以降、富士見町の本校での学部生活が始まった。爆撃で鉄筋の三つほどの建物が灰色のまま焼け残っていて、急造の木造モルタルの校舎が幾棟か建てられていた。しかし私には待望の学部である。授業開始の少し前、三月の末に呼び出しがあつて六角校舎の国文学会室へ出向いた。十数名の学生が集り、近藤、広末、正木の三先生が出席されていて「日本文学協会」の説明があつた。私はその場で日文協の学生会員となつた。六角校舎の国文学会室はうすぐらい部屋で壁に写楽の大首の絵と、誰の筆か判らないが定家の近代秀歌の一節を書いた色紙が掛かっていたのが妙に印象に残っている。どうせ複製であろうが煤で汚れていた。先輩に聞くと戦前から掛かっていたという由で、六角校舎がなくなつた今、写楽と定家はどこへ行つたのであろうか。日分協の説明会が散会したあと何かの用事で残っていた三名ほどの学生に近藤先生から声をかけられ、飯田橋駅前の外濠に面したコルヌという喫茶店でコーヒーをご馳走になった。その折私はやや興奮ぎみに教養部の現況を述べたてて自分で読書生活をせざるを得ないことなどを述べた模様である。近藤先生に「それは君のためにはかえつてよかったと思う」といわれ、また説経節の面白さなども述べたてたようである。そんな雑談の中で近藤先生の学究として、また人間としての豊かな優しさに初めて接し

たのである。

新学年が始まってすぐに木造の教室で日本文学科三・四年の顔合せがあり、近藤先生も出席で四五十名ほどが集り、自己紹介などがあつた。この時、日文科には編入者が多いことが特徴であることが判つた。鎌倉アカデミー、日本女子大、津田塾、外語露語科、旧制高校などで、編入者には優秀な人が多くこのうち幾人かは私にとって得がたい友人となつた。予科・教養部を経てきたものは、三年生では私を含めて三名にすぎなかつた。

学部での講義・演習のすべてが私には楽しかつた。教養部であればど学業を忘れていたのが学部三・四年の二年間はほぼ皆出席であつた。その上、英文科の山宮允教授（芥川龍之介の友人）のアイランド劇文学の講義を盗聴したりもしていた。

学部での授業内容については同学年の鈴木敬司さんや阪下圭八さんがすでに書いているので、私はそれには触れない。ただ学部に進んでからの私はすべてに積極的になつていて演習の報告を進んで買つて出たものである。

片岡先生の明治文学史の演習では藤村詩集の報告を受け持った。藤村の詩集のうちで特に「落梅集」の詩・文をとり上げ「若葉集」の華やかさがなく沈鬱なものの中にこの詩人が何かの変化を求める時期に来ていて、やがて散文に移らざるを得ないことをテーマとした。片岡先生に「落梅集」に目を向けたのはいい着眼だとはめられ、そのことが理由でもないがこのテーマを更に敷衍して卒業論文とした。

近藤先生の演習でも報告を担当した。藤井乙男「近松世話物全集」をテキストにゼミが進められていて、私は「天網島」を担当した。予科時代の広末先生の「国語」の講義ノートを参考にしながら報告文を作つたりした。

小田切先生は療養中であつたが、二七年の秋に復帰された。近・現代文学を期待していたが、意外にも「源氏物語」であつた。以前の濫読時代に通りの通読をしていたことがたいへん役に立った。しかし私は卒業間近であつたし、休講も多かったので「源氏」ゼミには三回しか出席できなかったことを今でも残念に思っている。

予科入学以前から思い描いていた三先生の講義を受講できたのは幸いであつた。

こうして二八年三月に学部を卒業し、さらにこのあと大学院での学業が続くのである。

（たなか きいち・一九六〇年博士課程修了 大阪音楽大学名誉教授）